

留学中の日本語学習動機とコミュニケーション意欲の観察 —交換留学生の L2 理想自己、L2 義務自己をもとに—

野 畑 理 佳

(武庫川女子大学短期大学部日本語文化学科)

Relationship between learning motivation and Willingness to Communicate:
Focus on the Ideal L2 self and Ought-to L2 self of exchange students majoring in the Japanese language

Rika NOHATA

*Department of Japanese Language, Junior College Division
Mukogawa Women's University*

Abstract

This study investigates the changes observed in exchange students' Japanese language learning motivation and Willingness to Communicate during their stay in Japan. Interviews are conducted with the participants had majored in Japanese language in their country and they studied for approximately 10 months to learn the language at university in Japan. Data was analyzed qualitatively via Steps for Coding and Theorization (SCAT) method, focusing on the Ideal L2 self and Ought-to L2 self. The results of the study suggest that 1) changes in their learning motivation were mainly affected by their Ought-to self during their stay in Japan; 2) the change in the Willingness to Communicate associated with the Ideal L2 self during their stay in Japan and support their learning motivation; 3) their various experiences including communication experiences in Japan were affected, which resulted in the emergence of a new Ideal L2 self; The study concludes that it is important to support the learning environment to enhance the students' Willingness to Communicate and induce Ideal L2 self, such that they retain their L2 learning motive after their studies in Japan.

1. はじめに

近年、日本において海外の大学との大学間交流協定数は大幅に増加しており¹⁾、大学間協定に基づく交換留学生数も増加していると考えられる。平成30年度の協定提携相手の上位3か国は順に中国、米国、韓国であるが²⁾、うち中国、韓国は日本語学習者数の上位3か国のうちに含まれ、大学に日本語専攻を持つ大学も多数である³⁾。交換留学のカリキュラムや留学生数は様々であるが、日本語を主専攻とする東アジアの学生が交換留学生として来日した場合、一般的には日本語能力が高く、留学生活も不安なく過ごすことが想像される。また日本語学習者数の多い東アジアの学生であれば、周囲から留学の成果を期待されるプレッシャーも抱えるであろう。しかしながら、留学中に学習動機を高いまま保つことができるかどうかは、もともとの日本語能力によるものだけではない。学習動機にかかわる要因は様々であり、留学先においてその言語を使う機会が頻繁であるかといった環境、どの程度コミュニケーションを積極的に行うかといった意思も周囲との関係によって変化するものである。留学中の経験を肯定的に評価するかどうかは、帰国後の学習や将来の進路選択にまで影響する可能性を持つ。日本語を主専攻とする交換留学生は、留学中に安定的な日本語学習動機を持続しているのか。変化するのであればその要因は何であろうか。また、日本語でのコミュニケーション機会が増えることは、コミュニケーション意欲

の高まりを導き、それは学習動機の維持に結びついているのか。本稿では、日本語を主専攻とする東アジア(中国および韓国)出身のある大学の交換留学生を対象とし、留学期間中の日本語学習動機の変化の要因を捉え、日本語コミュニケーション意欲との関連について、質的分析により探索的に検討する。

2. 先行研究および重要な概念

国内の日本語学習者を対象に、一定期間の学習動機の変容について質的に調査・分析した研究はいくつか見られるが、そのうち大学における留学生を対象とした研究はまだ少ない。小林(2014)⁴⁾は、日本で一定の留学期間を有し、卒業後日本での就職や進学を予定している中国人留学生を対象に、青年期の発達の文脈のなかで日本語学習に対する動機づけが形成されるプロセスと影響要因について調査を行っている。その結果、他律的に生まれた動機づけと個人的な動機づけが一体化することにより、日中の社会でキャリアを築くために学ぶという将来像と結びついた「理想の自己」が形成されるが、それには日本人との相互作用が果たす役割が大きいことを示している。本稿が対象とするような交換留学生の留学期間はより短く限定された期間の滞在であるため、留学先のコミュニティの中で人間関係が十分に構築されない場合もある。その点において、交換留学生の「理想の自己」がどのように描かれるかは検討が必要である。

交換留学生を対象にその学習動機の変化を調査した研究には原田(2008)⁵⁾がある。原田(前掲)は約9か月間甲南大学に滞在する5か国からの交換留学生を対象に、質問紙およびインタビュー調査を行い、自己決定度の低い外発的動機づけから、自己決定度の高い内発的動機づけへと変化していることを明らかにした。その要因の一つとして、調査対象者が留学期間中に全員日本人家庭にホームステイをしていることがあり、日本人と日常的に直接触れ合うという様々な接触体験の中から動機づけが変化していったことが述べられている。上記の調査から、学習者は日本人との異文化接触経験により、日本語使用者としての理想的な自己像を形成する可能性があること、また留学期間における日本語でのコミュニケーション経験は学習動機そのものに影響を与えることがわかる。この点を踏まえ、交換留学生の日本語学習動機の変容を、後述する留学中の「理想の自己」、およびコミュニケーション意欲との観点から捉える。

Dörnyei (2005)⁶⁾は第二言語学習の動機づけモデルとして、L2 Motivational Self System を提唱した。このモデルは複数の動機づけ理論およびモデルに心理学における可能自己⁷⁾、自己不一致理論⁸⁾を取り入れた枠組みで、(1) L2 理想自己(L2に関連する、理想とする自己。現在の自己との差を埋めるためにL2を学習する強い動機となる。)(2) L2 義務自己(L2に関連する、ならなければならない自己。期待に応えるためやマイナスの結果を避けるために果たす義務であり、より外発的な動機)(3) L2 学習経験(L2学習を実行する動機で、教師やカリキュラム、成功体験といった日々の学習環境や学習経験による動機)、の要素から構成され、その3要素は相互に影響しあっている。本稿の調査協力者である日本語を主専攻とする交換留学生は、自国の大学卒業時までには日本語能力試験1級への合格が期待されているため、長期的に見ればそれがL2義務自己を形成していると考えられる。また交換留学後には成績が出身大学に送られ単位が認定されるため、それが留学中の重要なL2義務自己となる。本稿では、このような学習者の背景を踏まえ、留学期間中のL2理想自己、義務自己に着目しながら学習動機の変化を観察する。

さらに、日本語でのコミュニケーション経験による影響を確認するため、日本語によるコミュニケーション意欲(Willingness to Communicate、以下WTC)を観察する。八島(2004)⁹⁾によるとWTC「第二言語を用いて他者と対話する意思」であり、第二言語におけるWTCのモデル¹⁰⁾には、心理的側面として学習動機も含む様々な構成要因が示されている。留学中の環境においては必然的に日本語によるコミュニケーション機会が増える。その機会を通じて周囲とコミュニケーションを積極的に行う意欲が高まり、同時に学習動機も高めていくような相乗効果が見られるならば、それは理想的な環境であると言える。野畑(2020)¹¹⁾においては本調査の一部として、留学中のWTCが関連する情意要因によってどのように影響を受けるのかについて報告した。本稿では、学習動機の変化とWTCの変化の要因とその関連につ

いて述べる。

3. 調査および分析の方法

Dörnyei (2001)¹²⁾は、第二言語学習動機において段階的な変化のプロセスが存在するとし、行動前段階(選択的動機付け)、行動段階(実行動機づけ)、行動後段階(動機づけを高める追観)とするプロセス・モデルを示した。交換留学生在が経験する一定期間の留学を当てはめると、留学を選択する行動前段階、来日し留学を実行している行動段階、そして帰国後が行動後の段階とすることができる。本稿においては、留学の実行段階において、学習動機の変化を時間的経過とともに捉えるため、半構造化インタビューおよび質問紙によるアンケート調査を留学中盤および終盤の2回実施し、質的分析を行った。インタビューの質問は学習動機にかかわる項目と、日本語WTCにかかわる項目を用意した。また、インタビューにおいては約10か月の留学期間中の日本語学習動機および日本語WTCについての変化を手書きの折れ線グラフで描いてもらい、その要因について尋ねた。インタビュー項目は以下のとおりである。

<インタビュー項目>

(1)アンケートの回答(自信、不安などの情意要因に関連する項目)ⁱ⁾に関し、留学前と変わった項目があるかとその理由(1回目の調査時)、1回目と変化した項目とその理由(2回目の調査時) (2)学習動機およびWTCの折れ線グラフについて変化した時期とその理由 (3)日本語の教室外のコミュニケーションで楽しさ、不安や緊張を感じる時の場面とその理由 (4)教室外で日本語を使用する頻度や相手の有無 (5)留学中の経験による日本の社会文化に対する考え方の変化の有無と、学習に対する影響 (6)日本語学習の開始時の学習動機、留学の動機、留学中の目標や学習動機の変化、2回目は帰国後の学習動機や目標 (7)留学中を含む過去の日本語学習経験において楽しさや辛さを感じた経験とその理由

表1 調査協力者

	出身	日本語能力	調査時期
a	韓国	JLPT N1 レベル	① 2017年8月 ② 2018年2月
b	中国	JLPT N2 レベル	① 2017年8月 ② 2018年2月
c	中国	JLPT N2 レベル	① 2018年8月 ② 2019年2月
d	韓国	JLPT N2 レベル	① 2018年8月 ② 2019年2月
e	中国	JLPT N2 レベル	① 2019年8月 ② 2020年1月

調査協力者はある大学に約10か月間の交換留学を経験した中国および韓国の女子大学生5名であり、いずれも出身国の大学で日本語を専攻している(表1)ⁱⁱ⁾。学習者a, dは韓国の同じ大学に所属し、学習者b, c, eも中国の同じ大学に所属している。日本語能力は日本語能力試験のN1レベルまたはN2レベルであるが、来日前に合格している場合と、来日後に受験し合格する場合がある。留学期間中は日本語授業を受けると同時に、文学部の専門の講義や共通教育科目の講義を受けることができ、5名全員が何らかの専門の講義を日本人学生とともに受講していた。留学期間中は寮に住むが、日本人とルームシェアをする場合と一人で住む場合が見られた。日本人学生とルームシェアをした学習者についても、日本人学生はアルバイト等で部屋にいないことが多く、話す機会は少ないとのことだった。

ⁱ⁾ アンケートの調査項目はコミュニケーション意欲の変化に関する情意要因として、自信、不安、危険負担、抑制の変化を調査する質問が主であり、「日本語が上手になる自信がある」「間違ふことは恥ずかしいことだと思う」といった項目について「全然そう思わない」「あまりそう思わない」「まあまあそう思う」「強く思う」から選択するものである。詳細は野畑(2020)に記述した。

ⁱⁱ⁾ 調査協力者のうち、aおよびcは野畑(2020)で報告した調査対象者と同一であり、表1のうちaが学習者B、cが学習者Aに相当する。

インタビューデータ(約 50 分のインタビュー、各 2 回ずつ)は筆者が文字化し、SCAT による分析を行った。SCAT はマトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、〈1〉データの注目すべき語句、〈2〉それを言い換えるためのテキスト外の語句、〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考へて付していく 4 段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。大谷(2019)¹³⁾によれば、明示的で段階的な質的データ分析手法であり、1 つだけのケースのデータなど比較的小さな質的データの分析にも有効である(p.271) とのことから、本研究で採用した。データの解釈はアンケート調査の結果も踏まえて行い、2 回目のインタビューデータの解釈は 1 回目のインタビューでの分析結果を踏まえて行った。

次に示す分析結果においては、まず学習者が描いた学習動機と日本語 WTC の折れ線グラフを示し、SCAT 分析で得られたストーリーラインをもとに、テーマ・構成概念を【 】により示しながら、その変化の要因について記述する。

4. 分析結果

5 名の学習動機および WTC の変化はそれぞれ異なっていた。以下、4-1 では学習動機および日本語 WTC のどちらも変化がないと捉えた学習者 b、4-2 では学習動機および日本語 WTC の変化を同様に捉えた学習者 a および e、4-3 では学習動機と日本語 WTC の変化を別々に捉えた学習者 c および d について述べる。

4-1. 学習者 b

図 1 は b が留学開始後 1 か月後から 10 か月後までの学習動機および WTC の変化を描いたグラフである。b の学習動機と WTC は、どちらも高いままを示す一本の線で描かれた。学習動機と WTC は安定しており、留学前から「ずっと同じ」「特に変化がない」と述べた。留学中には日本語能力試験を受験したが、帰国後に再度受験したいと述べるなど、自国の大学で求められる日本語能力が L2 義務自己として意識されていた。しかし、日本で友人を得た経験や、留学中の経験を肯定的に評価することで、【他者との関係構築におけるポジティブ感情】、【留学経験における文化的気づきによるポジティブ感情】を

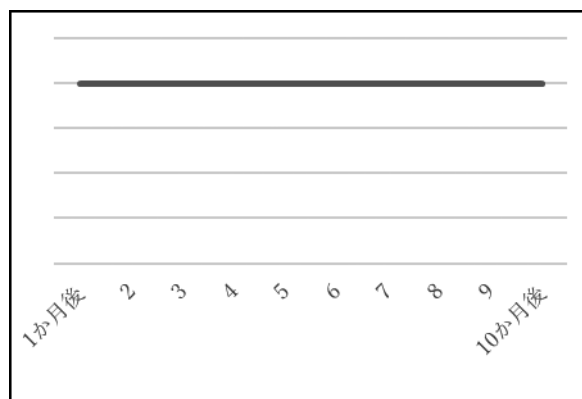


図 1 学習者 b の学習動機および WTC

獲得し、内発的動機をさらに強化させている。b は「実は、日本に来る前にただ、卒業旅行のように来ようか、というつもりだった」が、「実際に日本で生活してみたらやっぱり、もっとずっとここにいたいという気持ちになりました」と述べている。その理由の一つとして趣味である芸能人のライブに参加できたことをあげたが、このように b の安定的な学習動機には、もともと日本のポップカルチャーに高い関心を持ち、留学を通じて自身の興味により集中できる環境を得たことが背景にある(【内発的動機に基づく「楽しみ」としての日本語】)。そのため、【L2 義務自己および L2 理想自己に支えられた安定的な学習動機】が特徴であったと言える。

b は自身の興味にかかわる様々な活動をすることにより【行動の実現によるポジティブ感情】を得て、今後の将来像として日本に何度も来られるようなステイタスを得たいという L2 理想自己を描いた。

4-2. 学習者 a、学習者 e

学習者 a および e は留学期間の学習動機と WTC の変化を同様に捉えていた。

<学習者 a >

図2は、aが描いた留学開始後1か月後から10か月後までの学習動機およびWTCの変化である。aは学習動機とWTCの変化を同様だと見なした。

aの留学中の学習動機の変化の特徴は【L2 義務自己に支えられた学習動機】である。学習動機の変化は留学先の大学のカリキュラムと連動している。グラフが下がった留学開始4か月後は夏季休暇期間であり、休暇が終わると再び動機は高まる。aは夏季休暇後の学習動機を来日当初より少し低く描いたが、その後すぐに高まっており、それについては「頑張らないといけないとかそういうのを感じ

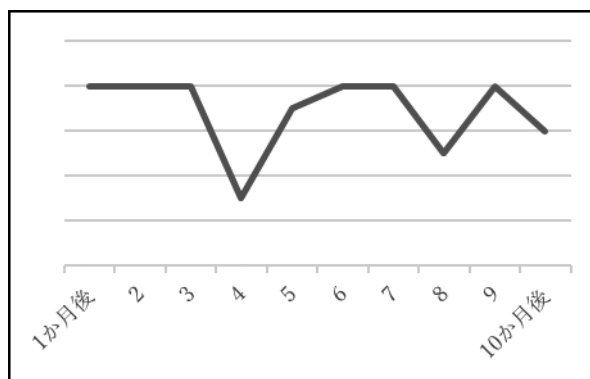


図2 学習者 a の学習動機および WTC

たから、それとなじまないといけないのもあって、緊張感とかそういうので、強制的に頑張ってしまうような、そういうのも入ってます」と述べた。このように、新学期の開始により【留学におけるL2 義務自己の意識化】が見られた。その後日本語能力試験の受験に向けて再度高くなるが、8か月後には冬期休暇となり再び低くなる。休暇後は大学の試験期間に合わせて再度高くなっている。aは留学後については「試験の時の気持ちをつなげる努力がすごく必要だと思います」と述べ、学習動機やWTCが全体的に下がることを予測した(【留学におけるL2 義務自己の解消】)。一方で、留学経験を振り返って「新しい経験が増えたことと、やっぱり言語、自分には努力、新しい能力、新しい能力が生まれたというか、作られた、その能力をつくることができたというかそういうのと繋がって、自信もついて」と語り、留学の経験を肯定的に評価し、【留学実行による自己成長の実感】【留学におけるL2 理想自己の実現】【留学経験の意義づけによる自信の高まり】が見られた。aは具体的な将来像をイメージしていたわけではないが、「他の分野が変わっても、そこでもやっぱり言語はどこで、どこにでも使えるから、この言語も生かしてそれを一緒にしたらいいと思います。これも自分の、どこかに履歴書とかそういうのに自分の能力として含まれるから。」と進路が変わっても言語能力を生かすという意味が語られ、留学におけるL2 理想自己が実現できたという実感により、自己効力感を持つ新たな自己を見出している。aのWTCの変化は上述のとおり学習動機の変化に紐づけて捉えられていたが、その語りからは、コミュニケーションの機会が楽しさといったポジティブな感情を伴う他者と関係構築の機会となっており、留学後半にかけて不安の解消と自信の高まりとともにWTCが高まっていく様子が観察された。

<学習者 e >

eは学習動機とWTCの変化を同様に捉えた(図3)。他の学習者とは異なり、学習動機が低い時点からスタートしている。これは留学のきっかけが【留学前のL2 義務自己からの解放】であったことに起因する。eは留学前の生活について「すごくプレッシャーをもらって」「たぶん半年、1年間ぐらいの間に勉強することを逃げるようになった」と述べ、その逃げが留学へのきっかけとなったと述べた。留学当初は生活環境の変化に慣れるまで時間を要したが、徐々に楽しめるようになり様々な興味を持ち始め、【学習環境の変化によるL2 理想自己の再構築】が起こった。他の学習者と同様、夏季休暇

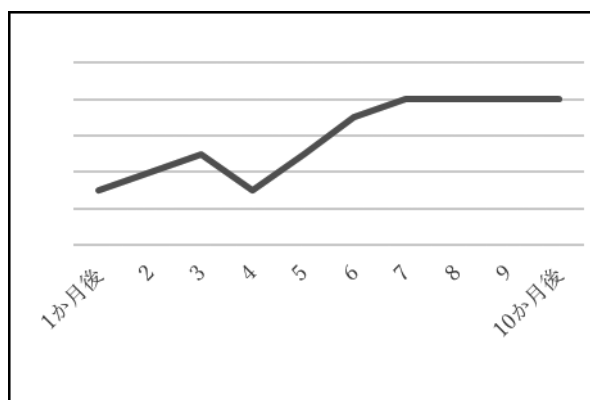


図3 学習者 e の学習動機および WTC

をきっかけに学習動機は低下するが、これも他者と異なる理由が存在する。夏季休暇になると友人や知り合いがみな旅行や帰省などで寮から離れてしまい、eの周りにはコミュニケーションをする相手が

なくなった。それにより「本当につらい」「鬱になった」状態が続いたが、その状況を改善するために一時的にアルバイトを行い他者とのコミュニケーション機会を自ら創り出すことで(【L2 理想自己の環境を変えるためのアクション】)、孤独感および強いストレスを克服するという経験をした。このような大変な経験は【L2 理想自己を目指した自己変容】につながっている。eは「(以前は)だれか私に話しかけてほしい、そういう気持ちがあるけど、後期は自分が話しかける、そういう気持ちが強くなった」と述べており、それが学習動機および WTC を引き上げていく。コミュニケーションに自信を持ち楽しむ、新たな日本語使用者としての理想自己を描いたのである。e が書いたグラフ上では留學生活終盤まで学習動機および WTC は高いままであったが、その語りにおいて、留學後半の授業には多くの宿題や課題を抱え、また複数の試験勉強をする必要があった負担感から日本語の授業に遅刻するようになったと述べている。それは留學中の義務自己からのプレッシャーに対する調整であったと言える(【留學における L2 義務自己からの解放】)。このように e の学習動機および WTC は、L2 義務自己との調整および L2 理想自己を目指した変化であったと言える。また e は「友達とのコミュニケーションですごく力をもらえたから」と述べ、それにより自身の将来を言語とかかわる仕事に関連付けて考え始めたことから(【帰国後の L2 理想自己の形成】)、留學後には学習動機も WTC も上がると自身で予測している。

4-3. 学習者 c、学習者 d

学習者 c および d は、学習動機の変化と WTC の変化を区別して捉えていた。

<学習者 c>

図 4 は c が描いた学習動機の変化、図 5 は WTC の変化である。c の学習動機は留學後徐々に上昇したが、それは新たな生活環境に慣れるまでの不安の解消とともに起こる。その後夏季休暇のために一時的に下がるが、休暇後にはまた上昇する。つまりカリキュラムに伴い学習動機は影響を受けつつ高いまま維持されており、【L2 義務自己に支えられた学習動機】が特徴であると言える。c は留學の後半も高い動機を維持したことに関し、「留學前はなんか日本語がまだ上手になりたい気持ちもありましたけど、その時は全然、日本語能力試験の N1 に合格しようという気持ちで、日本語が上手になりたいという感じですけど、日本に来てからその気持ち変わりました。その試験は卒業できるかどうかに関係ありませんけど、でも、なんか、もうどうでもいい気持ちで、あの試験はどうでもいい、もっと何か自分の生活とか日本人の友達のためとか、もっと何か日本語が上手になりたい気持ちになりました。」と述べ、【外発的動機から内発的動機への意識変化】を経験している。c はコミュニケーションにおいて失敗を経験しつつも自信を深めており、他者との関係構築を目指し WTC を高いまま維持していた。その他者とのコミュニケーション経験が上述の意識変化にもつながっている。「日本語で感謝の気持ちを伝えたいですから、日本語が上手になりたいという感じになりました」「帰国しても日本人の友達と一緒に話したい、遊びたいです。はい、だからもっと日本語を上手にしなきゃ駄目という気持ちになります。」と述べ、日本語で交流を続ける仲間を持つ L2 理想自己を描いている。WTC が高いまま維持されているこ

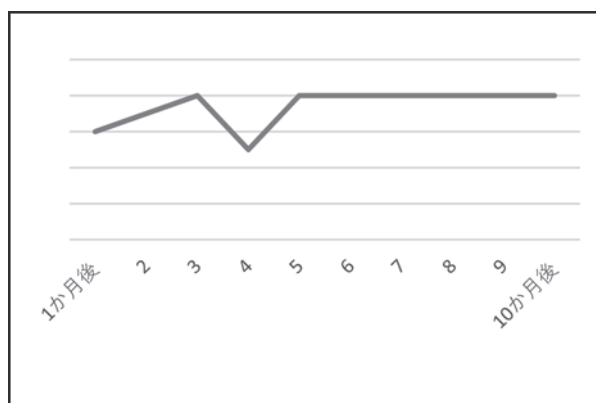


図 4 学習者 c の学習動機



図 5 学習者 c の WTC

とが学習動機に影響し、L2 義務自己よりも新たに形成された L2 理想自己が意識されていることがわかった。

<学習者 d >

図 6 は学習者 d が描いた学習動機の変化、図 7 は WTC の変化である。d の学習動機は、他の学習者と同様に夏季休暇の前まで下がり、休暇が終わることでまた上昇するため、その特徴は【L2 義務自己に支えられた学習動機】である。しかし d の場合は来日直後から徐々に休暇期間まで下がっており、その原因は同国出身の留学生がいなかったことによるホームシックが影響していた。休暇を終えると「また始まって、上手になりたいって思って」と述べ、【留学における L2 理想自己の意識化】により学習動機は高まっている。しかしながら冬期休暇の頃から低下していく。これは「もう留学が、もうすぐ終わって、何か上手になりたいより、もっと楽しもうって。」と述べ、【留学における L2 理想自己の確認】から【留学における L2 義務自己からの解放】を経験したことによる。d は留学したきっかけについて「一応、みんな留学に行く雰囲気があるから」と述べ、留学の動機そのものに L2 義務自己が強く意識されていたことがわかる。また帰国後の学習環境について「あそこはもっと厳しい生活なので」「(日本語が)できなかつたら恥ずかしい」と述べ、【帰国後の L2 義務自己の心理的負担】が見られた。そのため、留学中の L2 義務自己はより負担感の少ない【留学中のより自由な L2 義務自己】であるというのも特徴である。

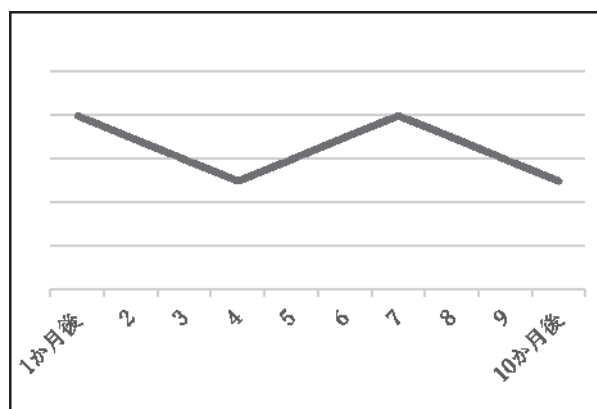


図 6 学習者 d の学習動機

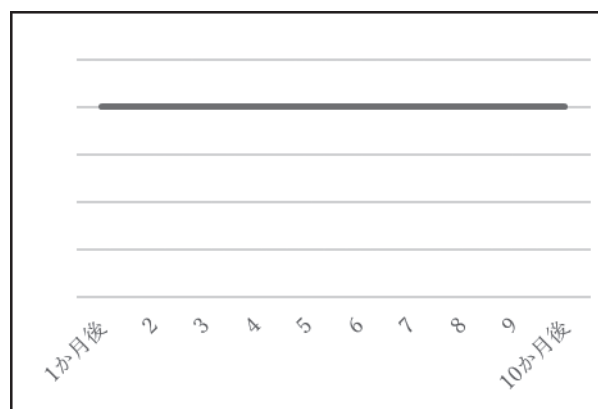


図 7 学習者 d の WTC

d は WTC の変化について、高いままの一本線で示した。それは「勉強じゃないから頑張らなくてもいい」と述べ、安定的な【L2 理想自己に基づく WTC】であった。d は日本の友人とのコミュニケーションについて「やっぱり韓国では考えずに言っても、みんなわかってくれるし、私の性格をみんな知ってるから、そういうのを理解してくれたんですけど、ここはあんまり私のことを理解できない状態に私がちょっと嫌なこと言ったら、それが私の性格って映っちゃうし、やっぱり気をつけた方がいいな」と述べるなど、話題の選択や表現のしかたに注意し【人間関係構築のためのコミュニケーション】を目指していた。それは【日本語使用者としての自己】についての語りでもある。またそのような日本でのコミュニケーション経験を通じて、自国の外国人に対する態度が変わったと述べている。さらに、d は留学中の日本語学習環境において、ヨーロッパ出身の留学生とクラスメートになったことがきっかけとなり、より国際的な交流経験をしたいと感じ【異文化コミュニティの中での L2 理想自己】を見出す。また留学中の日本語授業に関して肯定的に評価し「授業のおかげで本当に日本語に対する自信もついた」「先生たちが日本語だけじゃなくって、他の文化とか食文化とかいろんな文化とかも教えてくれたんで、その仕事がやっぱりしたいとか思って、私も自分の国の言葉とか文化とか教える仕事がいいな」「韓国帰ったらやりたいのは、日本語を教えるバイトがしたい」と述べ、卒業後の将来像と結び付けた【新たな L2 理想自己の形成】が見られた。d の学習動機は留学期間の終盤で下降していたが、その時期に卒業後のことを考え自身の日本語能力に不安を感じるようになったと述べており、より将来を志向した【L2 理想自己

の模索】の期間であったと言える。

5. 考察

5名の学習者の留学中における学習動機およびWTCの変化の捉え方はそれぞれであったが、日本語専攻の交換留学生という背景を踏まえると、少しずつ共通点も見えてくる。まず、1) 学習動機の変化は主に大学の休暇や学期の開始と関連付けられ、また日本語能力試験の受験時期には学習動機が高くなっていった。つまり留学期間中の学習動機は主に安定的なL2義務自己に支えられているということである。調査協力者は日本滞在中にみな日本語能力試験を受験していたが、日本語能力試験にいい点数で合格するという自国での卒業までに果たすべきL2義務自己が存在し、留学中の学習動機にも反映されている。dの場合は留学そのものの動機がL2義務自己によるものであったが、所属大学の日本語専攻の学生の多くが留学するという現状であれば、留学という選択は自然なことであっただろう。また留学時の成績は所属大学に送られるが、a, dの大学には合格したかどうかのみの成績が送られるという事情があり、留学中のL2義務自己はより緩やかなものであったと考えられる。

次に、2) WTCの変化について述べる。WTCが変化したと答えたのはaとeで、どちらも学習動機の変化と同様と捉えられているが、その変化のしかたは異なっている。aの学習動機がL2義務自己に支えられているのに対し、eの学習動機は留学後半にかけて高まっていく。それは留学前のL2義務自己から離れ、留学中にL2理想自己を描く過程であった。eは留学中に極端なストレスを抱えるが、自らコミュニケーションのできる環境を作り出し、WTCを高め新たな日本語使用者としての自己を見出すことにつながっていく。WTCの変化は、留学中に新たなL2理想自己を描くことと結びついている。

一方で、WTCは変化せず高いまま維持されたのはb, c, dである。そのうちcとdは学習動機とWTCを別々に描いているが、このように学習動機とWTCを別に捉えられた場合には、学習動機についてはL2義務自己がより意識され、WTCについてはよりL2理想自己が意識されていたと解釈できる。cは日本語でのコミュニケーションによって日本の友人との関係を構築し維持したいというL2理想自己を意識するようになり、留学後半には学習動機が高いまま保たれる。つまり、WTCが高まり学習動機が維持されるという相乗効果が見られるということである。dは日本ででの生活を楽しむこと、また日本の友人との関係を良好に維持するというL2理想自己を意識している。留学中に仲間を得てコミュニケーションを楽しむといった経験から、日本語使用者としての理想の自己を描いたのである。bは学習動機とWTCを区別しなかったが、どちらも変化がなく高いまま保たれている。bは留学時の様々な経験に加え、趣味である日本のポップカルチャーを楽しむという環境がL2理想自己に結びつき、それがWTCおよび学習動機の維持につながっていたと言える。このように、WTCの維持および変化は、留学時の経験やコミュニケーション経験を通じて形成されるL2理想自己と結びついている。

また、3) 5名はそれぞれ留学中に新たなL2理想自己を描き、自己の将来像に関連付けられる例も見られた。これには留学中の様々な経験による内発的動機の強化が関連している。留学中には肯定的な感情を伴う楽しい経験ばかりをするのではないが、様々な経験を重ね、人間関係の構築を目指して他者とコミュニケーションを行うなかで、日本語使用者としての自己を経験し、新たなL2理想自己が生み出されていくのである。dのように、留学時の日本語学習環境が将来像としてのL2理想自己に結びつく例もある。留学先での体験、日本語学習環境、他者とのコミュニケーションによる日本語使用者としての経験は、学習動機をより内発的なものへと導き、新たなL2理想自己を描くプロセスへと結びついている。

本研究は中国および韓国の大学で日本語を専攻とする5名の交換留学生を対象に、留学中の学習動機とコミュニケーション意欲の変化とその関連について、特にL2理想自己、L2義務自己の概念に着目しながら観察した。Ushioda (2009)¹⁴⁾はL2学習動機を個人差として捉えるのではなく、自己とアイデンティティに結びつくものと捉え、取り巻く社会との相互作用のなかで捉えていくことの重要性を指摘している。東アジアの日本語専攻の交換留学生にとっては、専攻というプレッシャーや、自国の大

学でのより厳しい学習環境の中での留学であるが、日本語使用者としての経験が楽しみや自信感を生み出し、新たな自己と結び付いていくことを考えれば、留学時の学習環境や生活環境、交流経験は帰国後の学習に向けて重要な意味を持つ。本稿では触れることはできなかったが、学習者は留学前の過去の日本語学習において挫折や苦しいと感じた経験を持ち、それを克服し日本語能力を高めて留学に至っている。留学の受け入れ側においてはプレッシャーを与えすぎない学習環境を目指し、日本語使用者としての経験をより豊かにすることでコミュニケーションの自信を高め、内発的動機が高まるような環境を提供していくことが望ましいと考えられる。留学の機会、日本語使用者としての経験を通じ、新たな自己をイメージすることにつながっている。

本研究は特定の大学の交換留学生を取り上げた調査であり、異なる国籍や日本語能力を持つ留学生については更なる調査が必要である。また留学期間などの交換留学の条件により結果は異なるであろう。学習動機の変化の要因については、個々の社会的文脈を考慮に入れた更なる分析が必要である。

引用文献

- 1) 文部科学省 . 海外の大学との大学間交流協定、海外における拠点に関する調査結果 令和 2 年 12 月 28 日改訂 . https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1287263.htm, (accessed 2021-08-20).
- 2) 上記(1)と同様の出典による。
- 3) 国際交流基金 . 2018 年度海外日本語教育機関調査 . <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>, (accessed 2021-08-20).
- 4) 小林 明子 . 中国人留学生の日本語学習に対する動機づけの形成過程 – 日本における将来像との関連から – . 異文化間教育 . 2014, 40, pp.97-111.
- 5) 原田 登美 . 留学経験は学習動機にいかに関わっているか : 「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化 . 言語と文化 . 2008, 12, pp.151-171.
- 6) Dornyei, Z. *The psychology of the Language Learner: individual differences in second language acquisition*. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum. 2005.
- 7) Markus, H., & Nurius, P. Possible selves. *American Psychologist*. 1986, Vol.41, No.9, pp. 954- 969.
- 8) Higgins, E. T. Self-discrepancy: a theory relating self and affect. *Psychological Review*. 1987, Vol. 94, No.3, pp.319-340.
- 9) 八島智子 . 外国語コミュニケーションの情意と動機 : 研究と教育の視点 . 関西大学出版 , 2004, 198p.
- 10) MacIntyre, P. D., Clement, R., Dörnyei, Z., and Noels, K. A. Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*. 1998, 82, pp.545-562.
- 11) 野畑 理佳 . 留学中の日本語学習者の情意要因の観察 – コミュニケーション意欲の変化とその要因 – . 武庫川女子大学紀要 . 2020, 68, pp.11-19.
- 12) Dornyei, Z. *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. 2001. (米山朝二・関昭典訳 . 動機付けを高める英語指導ストラテジー 35. 大修館書店 , 2005)
- 13) 大谷尚 . 質的研究の考え方 – 研究方法論から SCAT による分析まで – . 名古屋大学出版会 , 2019, 403p.
- 14) Ushioda, E. 2009. A person-in-context relational view of emergent motivation, self and identity. *Motivation, language identity and the L2 self*. Bristol: Multilingual Matters. 2009, pp.215-228.

受理日 2021 年 12 月 7 日